巻頭言

森山新

2012 年に開始された国際学生フォーラムは今年で第 12 回目を数えた。今回は COIL 事業の最終年度という意味から、事前授業、フォーラムを含め全てオンラインで実施された。

COIL は Collaborative Online International Learning の略で、大学の世界展開力強化事業として実施されている。本学は上智大、静岡県立大とともに 2018 年に採択された。日米の大学がオンラインでの共同の学びを積極的に活用し、留学や国際交流など、様々な国際的な学びの促進につなげようとする事業である。今回は事前学習で、ZOOM を大学対大学の交流や事前準備、講演会を含む事前学習に、Facebook や LINE などの SNS を学生対学生の交流に活用した。

国境を超えて学生が交流し学ぶ国際共同学習は、短期間のセミナーやフォーラムとなることが多い。そこでは、短期間の直接交流で親睦を深め、その信頼の基盤の上に対話や討論を行い、成果をあげていくことになるが、そういったことは現実には容易なことではない。有効な成果を引き出すには、フォーラム実施以前から ZOOM や SNS を積極的に活用し、オンラインで交流や親睦を深め、学び合う場を持つようにすることが必要である。それは、短期研修の短所を克服、長期化、日常化し、より大きな成果を上げることにつながる。その意味で COIL 事業として全面オンラインで実施されたフォーラムの開催は、国境を越えた対話の場を日常的に提供する可能性を提示し、国際交流の可能性をこれまで以上に高めてくれたものと思っている。

また、通常の授業とは異なり、発表の事前準備、事前学習は、学生自らが相互に連絡を取り合い、オンライン上で会し、それぞれが自身に任された担当を主体的にこなしていかなければならない。しかもそれらは国境、言語の壁を越え、時差や学時歴の違いを克服し、実施しなければならない。その意味で学生の自律性、主体性が育まれ、グローバルなリーダーシップ育成につながる。

10 月、本学とヴァッサー大で説明会を開催し参加者を募集、その後本学側は対面で 2 週間に一度、合同授業はオンラインで月 1 回のペースで、フォーラムの事前準備、事前学習を行った。2〜3 月に実施されたフォーラム本番では、日米合同の 3 つのグループがそれぞれのテーマで発表を行ったが、その際には複言語主義の立場から互いに相手の言語（英語または日本語）を用いて発表した。どの学生の発表にも共通しているのは、多様性と包括性という、日米両国にとってそれぞれ大きな社会問題となっており、かついまだに克服できたとは決して言い難い難題を、相手国の取り組みなどを参考にしたり、比較したりする中で、有益な回答を導き出しており、そのような難題に取り組む中で、多様性を包括しうるリーダーシップを育んだということである。まさしく間文化的シティズンシップ教育の

場としての国際学生フォーラムにふさわしい姿であった。

基調講演で私は、まず今回のテーマである「多様性と包括性」について趣旨説明を行った。米国は歴史的に多くの移民を受け入れ、どこよりも多様性の豊かな国であるが、そこに存在する人種などの壁をいまだに克服できずにいる。一方日本は、一部で単一民族とのナラティブが語られることがあるが、それは実際のアイヌや沖縄、そして様々な理由で日本社会で暮らす人たちの多様性を覆い隠す言動に他ならない。さらにグローバル時代にあっては、国籍、文化、言語などを異にする人々が続々と日本で暮らすようになり、もはや多様性から目を逸らすことはできない時代となっている。しかしながら、他のどこよりもこの、多様性とその包括に慣れていないのも、今日の日本の偽らざる姿である。このように日米ともに、それぞれが多様性とその包括について、多くの課題を抱え、克服できずにいる。

こうした日米の学生に、このフォーラムは多様性と包括性を再考する有効な場を提供した。事前学習、及びフォーラムの基調講演では、DiAngelo の White Fragility をはじめ、Allport の The Nature of Prejudice、Gaertner and Dovidio の Reducing Intergroup Bias、Steele の Whistling Vivaldi: How Stereotypes Affect Us and What We Can Do、James, Dovidio, and Vertze の The psychology of Diversity: Beyond Prejudice and Racism などを参考に、日米の多様性と包摂性の現状と課題について紹介した。

Higher Education: A Critical Business の著者である Ronald Barnett によれば、高等教育、すなわち大学とは、既存の知識、自己、世界をクリティカルに見つめ、問題を解決し、よりよい知識、自己、世界を構築する歩みの先頭に立つべき者の集まりである。日米の大学、日米のリベラルアーツカレッジを代表するヴァッサーと本学の学生により、そのような大学人のミッションにふさわしい発表と実践の場が持たれたことは、意義あることである。

世界はまさに今、ウクライナとロシアの対立に象徴されるように、国籍、民族、歴史、思想を異にする他者が、ともに生きるのとは正反対の戦争を引き起こし、対立の度合いを深めている。隣国の中国、韓国でもいまだに主義、思想、体制の違いを克服できずにおり、日本と中国、日本と韓国もまた、過去を克服し、和解に至れずにいる。このフォーラムに参加し、多様性と包括性を学んだ両国の学生たちが、異なる他者とともに平和な世界を築いていくために、先頭に立つリーダーとなってくれればと思っている。

最後に、ヴァッサー大学の丘先生、土屋先生、講演を行ってくださった日米の先生方、そしてフォーラムの成功にご尽力くださった両校の国際業務関係者の皆様に心から感謝を申し上げたい。